

発行
2015
3/30

まつもと 公民館報



シリーズ 受け継ぎ伝える松本のたから 18

＝ 松本市重要無形民俗文化財 ＝

あし 足半 両島のお八日念仏と足半

(足半とは踵のない短い草履のこと)

**大きな足半で
疫病神を追い払う**

2月11日(水・祝)の朝、足半草履保存会の仲間が両島公民館に集まり、藁で大きな足半を二つ作ります。

足半ができると祭壇に飾り、音頭取りの鉦の音に合わせて数珠を回して、八日念仏を唱えます。念仏が終わると、両島町会境の南と北にある大きな木に結び付けてきます。

江戸時代から伝わるこの行事は、村人の無病息災と家内安全、五穀豊穡を祈念して始まったようです。

市内に伝承されている「こと八日」の行事を、次世代に伝えていって欲しいものです。

地域をつなぎ暮らしを創る〜公民館の可能性を探る

第30回 松本市公民館研究集会

2月15日中央公民館に、約400人の市民・関係者が参加して公民館研究集会が開催されました。

少子高齢化・人口減に直面している地域の現状に、公民館は今どう応えることができるのか、あらためて真価を問われています。そこで「健康寿命延伸都市」を考え「学都松本」の人づくりの視点から公民館の成果と課題を整理することをテーマに、基調講演と11分科会で熱心な意見交換が行われました。2面と5面にその要旨を掲載いたします。

『基調講演』 「3・11以後の 公民館の使命」

NPO法人教育支援協会

代表理事 吉田 博彦氏

東日本大震災以後の社会情勢や公民館の全国的な動向等をふまえながら、これからの公民館に期待される役割やあり方、可能性について講演されました。

まずは現代社会をきちんと認識し、「内からわきあがる力」で良きことをしたいと思う人が多い社会」を実現すること、地域住民が自発的に参加することを前提に、個人の要望に基づき生涯学習を展開すること等々の指摘がありました。



吉田博彦氏による「基調講演」

そして、公民館のこれからの方向性としての結論は、1946年文部次官通牒「公民館の設置運営について」や「公民館設置要綱」に謳われた公民館の姿を実現することと結ばれました。

第1分科会

「町会・町内公民館」 地域と人を繋ぐ町会

町内公民館の役割とは

社会情勢の変化、また住民意識が多様化するなかで、地域づくりへの住民参加をいかに促すかが問われています。

平成20年に発足したばかりの和田「西原町会」。何もわからないなかでの町づくりと住民参加の難しさに試行錯誤を重ねながらも、地域づくりの積み上げにより住民間のつながりができてきました。

一方、団地誕生から40年、高齢化率が市の平均を超えるなか、工夫を重ねることで行事の参加人数が増加、住民同士の交流が進んだ笹賀「二美町2丁目町会」。新旧の町づくり事例には、その実行力に深い感銘をうけました。



全11分科会で討議を深める

第6分科会

「地域福祉」

町会での見守り活動 からつなげる支え合い

超高齢化社会を迎え、高齢の独り暮らしや夫婦世帯・認知症患者の増加が予想されるなかで、「孤立」や「閉じこもり」を防ぐため、近隣での「見守り」が重要になっています。

この分科会では、地域で行われている三つの事例発表をふまえ、町会や隣近所で行えるかが討議されました。

プライベートを尊重しながら、町会・隣近所つながりづくりを進めることや、認知症に対する周囲の理解を広めることの大切さ、またその仕組みづくり等について真剣に話し合われました。



寿地区子育て支援192サロン

第4分科会

「子ども・子育て」

今の子育てに、地域や 公民館ができること

話題提供が「寿地区子育て支援192(いくじ)サロン」・「松本ママの会」・市のこども育成課からありました。

特に転勤族の若い母親たちでつくる「松本ママの会」からは、地域の行事に子どもを参加させたいが詳細な情報が得られない、また親兄弟など頼れる人が少ないなか気軽に子どもを預けられるサービスがあれば、といった切実な要望が出されました。

グループ討議では、地域の子育て支援や公民館ができることについて論議を深めました。



下新南町会長寿会のハーモニカ教室

第10分科会
「公民館委員会」
公民館委員の
学びによる地域づくり

公民館活動の形骸化・マンネリ化などが課題として提示される一方で、田川公民館図書視聴覚委員会による読み聞かせボランティアや、有志を中心とした寿公民館視聴覚委員会の自由な活動の様子など、住民主体の活気ある事例発表が行われました。

参加者は、その充実した活動に興味津々で、質問や前向きな発言がたくさん飛び交いました。公民館のあり方は地域ごとさまざまで、公民館長の裁量によっても変わります。



田川公民館図書視聴覚委員の読み聞かせ

地域の特色を生かし、住民の声をすくいあげてくれる公民館が期待されています。

特別分科会
「文部科学省委託事業」
公民館の学びが「つなぐ、松本らしい地域づくり・人づくり」

事業2年目が終了し、6つのテーマ型講座の成果が報告されました。

「松本らしい地域づくり・人づくり」に向けて、公民館の学習が市民と行政等をつなぎ、住民全体で地域の課題を解決するという「取り組みの形」が見えてきました。テーマ型講座の一つである

「高齢者支援講座」では、「地域・公民館・福祉ひろば等が連携し、高齢者を地域で支えるためにはどうしたらよいか」を学んだことで、独自にサロン事業を立ち上げる町会もできました。

情報交換コーナー

全14団体・公民館によるさまざまな分野の情報発信が行われました。各団体の創意工夫がみられる展示はどれも興味深いものでした。

なかでも「寿地区子育て支援192サロン」や、市の「生きる力(キャリア教育)育成事業」、文部科学大臣表彰を受けた寿学校応援団など、子

どもの成長を見守る取り組みが目立ちました。館報全市版からも、本紙連載中の「まつもとの今昔」を大型パネルで紹介しました。



館報全市版からも写真パネルを出展

写真でつづる
まつもとの今昔⑳

～ 信大医学部附属病院 ～



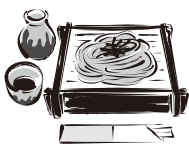
昔 (1976.3.22 写真提供: 日本報道写真連盟)
信大医学部附属病院の南病棟と北病棟の夜景、写っていないが西側に中病棟があった。うっすらと雪が残っている。



今 (2014.3.3 撮影)
新しくなった病棟の周りは駐車場が増えて、機能的になった。

おこひる

公民館のそば打ち講座に参加するようになつて約2年になる。おかげさまでこの間、講師先生及び先輩たちにはいへんお世話になり、粉を練るところからそば切りまで、一連のそば打ちができるようになった▼そば粉と小麦粉の割合は八対二で、水は神社の湧水を使用。水まわし、練る、のす、切る動作を、自分の番が回ってくるまで先輩たちの手元をよく見ている。あとは見様見真似で打つが、難しく奥深い▼毎回皆で食べるそばは、どのおそば屋さんより美味しいと自負している。「ひきたて」「打ちたて」大鍋での「茹でたて」と、三拍子そろったそばをいただくことの幸せを感じる。そば切りで切り損じたものを集めてうすやきにする。特製のねぎ味噌をつけていただく。これもまた美味しい▼趣味が一つ増えた。毎月この日がくるのを心待ちにしている。低カロリーでタンパク質・食物繊維が多く、脳卒中や高血圧にも良いといわれるそばを打ち、一層美味しいそばを追求していきたいと思う。



地域探訪

歩まろう松本!

22

中央地区ウォーキングコース

大名町―西堀―六九町の女鳥羽川沿い―縄手―緑町―上土―片端総掘―北馬場―外堀を結ぶ松本城周辺2・6キロの散策ルートには、まつもと城下町湧水群に登録された8か所の井戸があります。旧くは16世紀に遡り、江戸時代、明治時代から昭和初期にかけて造られたものが多く、松本城史跡めぐりにもなります。

大名町大手門駐車場角と西堀通り角の大名町大手門井戸と西堀公園井戸は最近整備されたばかりですが、夏には通りかかる人々ののどを潤します。人混みの縄手通りを緑町に入ると、松本城辰巳隅櫓と辰巳御殿のあった公園に辰巳の庭があります。夏には一休みの人も多くみられます。上土の下町会館には、江戸時代、町人・農民が城内へ出入りを許された東門の跡にあり、その一角にあるのが東門の井戸です。片端総掘北のほうには、武士しか出入りできない北門がありました。



北門大井戸

明治19年、総堀の半分が埋め立てられた時に、北門大井戸が掘られました。豊かな水量は、総堀を流れ女鳥羽川に注ぎます。北馬場通りを数分、左側に大きな老柳の下に北馬場柳の井戸があります。埋め立てられた総堀跡地に自噴したそうです。外堀の西にある松本神社に昔から湧く湯谷霊水、そのすぐ前に松本神社前の井戸があり、夏は観光客が涼をとります。外堀に沿って、市役所通り北側にあるカトリック教会と会計事務所の間に「地藏尊出現 霊水地」記念碑と共に地藏清水の井戸があります。1585年頃、井戸掘削中に掘り出された、製作が1188年とされる地藏尊にちなんだ最も歴史のある井戸です。

地産地消のかたんレシピ

サクサク感がたまらない『長芋チップス』

長芋と油が見事な調和!!

材料:長芋、オリーブオイル、塩、ポン酢、胡麻

1. 長芋を長さ5cm、7mm角に切り、水にさらす
2. フライパンにオリーブオイルをひき、焦げ目がつくまで炒め塩で味付ける
3. 好みで胡麻とポン酢をかける



わがまち自慢 第5回

「入山辺文化誌」完成!

「入山辺文化誌」が昨年12月に完成し、このほど全戸に無償配布されました。

本文文化誌は、上下2巻970ページに及びますが、表や写真を随所に配置して、読みやすく構成されています。

入山辺の公民館報は、昭和24年10月に創刊されており、平成26年9月に通算400号の節目を迎えました。

この機に、館報の合冊版と併せて、歴史文化基本構想で調査した各町会文化資産(伝統行事・石造物・神社仏閣・風景等)を網羅した「入山辺文化誌」を発刊することとして、平成25年から作業を進めてきました。

作成にあたっては、地区公民館を事務局として、元地区



完成した「入山辺文化誌」

公民館長3名、館報編集委員4名が執筆、編集に携わりました。

文化誌には、戦後の混乱期から入山辺の人々が築いてきた文化、行事、教育等の貴重な歩みが記されています。

「折にふれ、この文化誌を開いて、65年間の先人の努力に学んでほしい。」

今後、本誌を活用した歴史文化講座の開催が計画されています。